

題：「宗教改革におけるプロテスタントの五大原理」

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです。」

皆さん、おはようございます。今日、皆さんにお会いできてうれしいです。今月（10月）、お祝いすべき大小の二つの記念日があることに気付きます。一つは、OICにとっての一つ重要な記念日です。1974年に最初の礼拝を初めて以来、今月で48周年目となります。来週、私たちは、それを祝います。そして、私は大阪インターナショナル・チャーチの人生の行事を記念するための説教を用意しています。皆さんは、来週、そのメッセージを聞くでしょう。

同時に、私の人生における小さな記念日がこの季節にあります。私がOICで初めて説教をしたのが、5年前のこの秋でした。そして最初の説教で、私の心の近くあるトピックを説教しました。そして、今日、再びそのテーマでお話しします。それは、このイントロダクションで私が申し上げたい3番目の記念日へと私を導くのは、この10月が宗教改革の誕生日です。それは、5年前の私の最初の説教のトピックでした。そして、今日、皆さんに再び、その説教をお分かちしたいと思います。この鍵となるイベントとその背後にある原則を私たちが覚えていることは重要だと思います。元のメッセージに、2-3の改良と変更をしましたが、今日、皆さんにこの説教を分かち合います。題：「宗教改革におけるプロテスタントの五大原理」

毎年10月には、この重要な行事を記念する、多くのプロテスタント教会があります。教会の歴史だけでなく、世界の歴史をも変えた記念日を迎えます。実際にその出来事が起こった10月1517年当時は、それほど大事件ではありませんでした。しかし、この出来事が火付け役となり、ヨーロッパ全域の教会を揺るがし、現代にまでその影響を残す数々の出来事が起こりました。

1517年10月31日のことです。万聖節と呼ばれるクリスチャンのお祭りの前日でした。このお祭りは11月1日に祝われていました。その前夜にドイツのヴィッテンベルクという町で司祭であり神学教授であったマルティン・ルターのしたことが、後に宗教改革となる大きな運動の口火を切りました。

今日のメッセージでは、皆さんにマルティン・ルターの人生についての映画からいくつか短い映像をご覧ください。では、最初の映像をご覧ください。これは、10月31日の出来事です。最初の場面で、ルターはある重要な文書をしたためています。その後、彼はどのようなのでしょ

(映像1)

マルティン・ルター（祈っている）：愛する主イエス・キリスト…このすべてにおいて、私の思いではなく、あなたのみこころがなされますように。アーメン。

ナレーター：ヴィッテンベルク。1517年10月31日。万聖節前夜。マルティン・ルターは、聖遺物の前で礼拝するのを待つ周囲の人々に気づかれることもなくヴィッテンベルク城教会へと足を進めた。教会の扉にお知らせを貼ることは、当時珍しくもなかった。そこは、大学や一般のイベントの広告などを掲示する場として使われていたからである。赦しや祝福を得ようと集まる人々は、ここに貼り出される文書が後世まで読み継がれるものとなるとは知る由もなかった。

今日のメッセージには、歴史の講義、聖書解釈、そしてマルティン・ルターと私個人の証が含まれています。まず、歴史についてお話し、それから証です。

この日ルターがしたことは、単純な行為のようでした。しかしこの文書は、学者たちの議論のきっかけとなりました。その内容は、あらゆる角度からルターが聖書的でないと考えたキリスト教の慣習についてでした。これは事実上、挑戦状をたたきつける行為でした。ここで問題とされていたのは、「免罪符」の販売についてでした。「免罪符」とは、司祭や教皇など教会の指導者が発行する罪の赦しの証明書のようなものです。時間の関係で、免罪符についてここで詳しく説明することはできませんが、マルティン・ルターのいた時代、免罪符は教会でよく販売されていました。当時は、教皇からの特別免罪符というものがあって、それはローマの建築費をまかなうための募金活動の手段として使われていました。ルターはこれに我慢できませんでした。免罪符に批判の声を上げたのはルターが初めてではありませんでしたが、10月31日のルターの行動が、それまでになく人々の関心を集めることとなったのです。

この文書に、ルターは提題を簡条書きにし、学者たちに議論を求めました。これは、「95カ条の論題」と呼ばれています。10月31日、ルターはこの「95カ条の論題」の複写を大主教にも送りました。免罪符そのものやその販売行為が神学的にも実践的にも問題であることを大主教に知らせたかったからです。

この話は私にとってとても特別な意味があります。私は12歳になるまで、家族といっしょにルーテル派の教会に通っていました。私の母はルーテル派の出身ではありませんでしたが、その教会の日曜学校が町では一番評判がよく、母が子どもたちをそこに通わせたいと望んだからです。私はここで、キリスト教の教えの基礎を学びました。天地創造、アブラハムの召し、12部族の父祖、モーセ、ダビデ、イエスと弟子たちなどたくさんの聖書のお話を聞いて学びました。また、マルティン・ルターをはじめとする教会史に名を残す英雄たちのお話も聞きました。

私は実際にヴィッテンベルクの町を訪れ、ルターゆかりの場所を訪ねました。これは、現在の城教会の門扉の写真です。当時は木造の扉で、今はもうありません。現在は、扉を模した青銅板に95カ条の論題の全文が刻まれています。

私はルーテル教会の教会員にはなりませんでしたが。大学生時代、私は無教派教会でクリスチャンになりました。20代のときはバプテスト教会の教会員になりました。

しかし過去5-6年間、私は母が私たちに与えてくれたすばらしいキリスト教の基礎となった町で一番の日曜学校について思い起こすことがよくあります。また、宗教改革についてもよく考えます。宗教改革は、聖書に重きを置き、教会の中でも外でもすべてにおいて聖書の教えに従うことを強調します。毎週日曜のメッセージをとおして、神のみことばを教えることの重要性を説く宗教改革を高く評価するようになりました。私たちは、神のみことばに情熱を注ぎ、みことばに則って生きることを強調した人々の恩恵を受けています。

今日のトピック：「宗教改革におけるプロテスタントの五大原理」

マルティン・ルターが宗教改革の火付け役となってから、これらの五大原理がこの運動の旗印となりました。それぞれの原理は「～のみ」を意味するラテン語の「ソラ」という単語で始まります。五大原理はラテン語の声明というかたちで記されていました。

原理その一：ソラ・スクリプトゥラ「聖書のみ」

この原理によると、教会は伝統や教え、教会議会による決断のすべての上に聖書の権威を置かなくてはなりません。聖書は、キリスト教の信仰と慣習すべてにおける最高権威です。

この五大原理は、中世ローマカトリック教の教義や慣習と対比したかたちで形成されました。改革派の人々には、カトリック教会が教会の伝統や教会指導者の言葉を聖書の教えよりも重視しているように見えました。そこで、改革派の人々は、聖書第一に立ち戻るよう教会に呼びかけたのです。

原理その二：ソラ・フィデ「信仰のみ」

義と認められるのは信仰によってのみであり、行いによるものではありません。私たちは、救いを得るために善行をするではありません。

原理その三：ソラ・グラティア「恵みのみ」

救いは神の恵みによってのみ与えられます。最初から最後まで、救いは神の御業です。

原理その四：ソルス・クリストゥス「キリストのみ」または「キリストによってのみ」

キリストが人と神の唯一の仲介者です。テモテ第一 2：5 が語るとおり、キリストをとおしてのみ、私たちは父なる神とつながることができるのです。

原理その五：ソリ・デオ・グロリア「神の栄光のみ」

私たちの言動はすべて神の栄光のためになされるべきです。私たちにある良いものはすべて神から与えられたものです。ですから、自分の功績ではありません。神が栄光をお受けになるべきです。

これらの五大原理は「五つのソラ」と呼ばれています。これから、それぞれの原理を詳しく見ていくことにしましょう。ひとつめの原理については、たくさんお話したいことがあります。今日の時間のほとんどをこのひとつめの原理に使いたいと思います。

原理その一：ソラ・スクリプトゥラ「聖書のみ」

これは、聖書が、キリスト教信仰と慣習のすべてにおいて唯一の最高権威であるという教えです。

ではまず、新約聖書の一節を読みましょう。これは、使徒パウロがエペソの教会で仕えていたテモテに書き送ったものです。

テモテ第二 3：14-17

3:14 けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、 3:15 また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。 3:16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。 3:17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

16節にご注目ください。これはとても重要な箇所です。「聖書はすべて、神の靈感によるもので」。この「靈感による」と訳された単語は、直訳すると「神の息が吹き込まれた」という意味です。聖書は、神の息のように神から出たことばです。創造主なる神からのものですから、権威があります。また、ここには、聖書が「有益」だとも記されています。私たちに神について教えるため、そして私たちがどう生きるべきかを教えるために有益なのです。戒めと矯正とのために。それは、私たちが過ちを犯したときに正しい道へと戻らせてくれるということです。義の訓練のために。「義」という単語を目にすると、私はそれを「正しい生き方」という言葉に入れ替えてみます。「正しい生き方の訓練のために」。私たちは正しい生き方をすべきです。神に喜んでいただけるりっぱな生き方です。みことばは、私たちに正しい生き方を教えてくれます。17節。聖書を私たちのガイドブックとすれば、私たちひとりひとりが、すべての良い働きと教会の働きのために整えられます。

では次に、ペテロ第二 1：20-21 を読みましょう。

ペテロ第二 1：20-21

1:20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。 1:21 なぜなら、預言

は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。

ここから、聖書に記された預言が、それを語った人物の個人的解釈や意志ではなかったことがわかります。預言者は聖霊によって語らされていた人たちです。彼らは神の言葉を語りました。

改革派支持者がソラ・スクリプトゥラの教えを推し進めたのは、ローマカトリック教会への反発からです。ローマカトリック教会では、教会の制度や決めごと、伝統といったものを聖書より重視する傾向にありました。改革派支持者は、教義と実践のどちらにおいても神のみことばを第一とすべきだと主張しました。

ところで、ソラ・スクリプトゥラ「聖書のみ」と言うとき、教父や教会の牧師の書いた書物や説教を捨て去るという意味ではありません。それらの書物も大切です。たいていの場合、そのような書物は正統な教えであり、有益です。改革派支持者もアウグスチヌスなどの教父の書物の内容に訴えました。しかし、このような人々が完べきでないこと、そして最終的な基準となるのは聖書であることを忘れてはいけません。

マルティン・ルターは、もうひとつ大切な仕事にとりかかりました。それは、聖書をドイツ語に翻訳することです。改革派支持者にとって、神のみことばを人々の理解できる言語で届けることはきわめて重要でした。また、これは「改革前派」と呼ばれる人々にとっても重要でした。14世紀の英国で、ジョン・ウィクリフは聖書を英語に翻訳しました。15世紀には、ボヘミアでヤン・フス率いる一同がチェコ語訳の聖書を改訳しました。これらの人々は、ウルガタ聖書と呼ばれる標準ラテン語訳聖書から翻訳をしました。しかし、16世紀になって、新約聖書のギリシャ語版が神学者であったロッテルダムのエラスムスによって公開されました。これは、教会にとって大きな賜物でした。ドイツのルター、スイスのフルドリッヒ・ツヴィングリ、英国のウィリアム・ティンデルといった改革派支持者は、一般庶民の言語へと聖書をよりよく翻訳するために、このギリシャ語版聖書を用いました。

ソラ・スクリプトゥラについて、最後にふたつのことをお伝えします。まず、改革派支持者は、私たちの信仰と慣わしの唯一のものさしとして聖書に従うことに立ち戻るよう、教会に呼びかけました。次に、私たちクリスチャンは、神から尊い賜物を受けています。それが聖書です。それによって、私たちは生き方を知ります。永遠のいのちを得る方法を知ります。そして、創造主なる神との正しい関係を築く方法を知ります。この数年、教会史を研究してきて、私はこのことについて思いを巡らしてきました。キリスト教の歴史の大部分の時代、庶民は読み書きができず、聖書を自分で読むことができませんでした。けれども、聖書に則って生きるという改革派支持者の呼びかけと聖書の一般言語への翻訳、また、印刷技術の発明と識字率の向上により、神のみことばが容易く手の届くものとなりました。ですから、クリスチャンの皆さん、聖書を読み、そのみことばを黙想しましょう。それをつづけましょう。みことばによって生き、私たちの神を知りましょう。私たちは、なんとも尊い賜物をいただいているのです。

では、他4つの原理に進みましょう。残りの4つには、ひとつめほどの時間は費やしません。

原理その二：ソラ・フィデ「信仰のみ」

これは、義認についてです。働きではなく、信仰によってのみということです。中世の教会で起こっていたことに対比したものです。中世の教会では、宗教上の善行をとおして救いを得ようという努力がなされていたからです。

マルティン・ルターは、若い修道士だったころ、心の中の罪に悩まされていました。肉の罪と葛藤していたわけではありません。心や思いの中にあるものに悩まされていたのです。彼は、自分の思いが主から離れていってしまうことや、神をもっと愛すべきだと思いながらそうできていない自分に悩みました。そのような自分が、全能で完全に聖なる神に受け入れてもらえるわけがないと思ったのです。

そして、ローマ人への手紙についての説教の準備をしていたとき、信仰の誕生を経験しました。彼は、自分の疑問に対する答えをローマ 1 : 17に見出したのです。

ローマ 1:17 なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

信仰によって。信仰に始まり信仰に進ませる。信仰が中心だったのです。マルティン・ルターはついに、十字架上で成されたキリストの御業によって人は神の前に義とされることを悟ったのです。私たちの働きではありません。私たちは、信仰によって神からの賜物である救いを受け取ります。私たちは、信仰によって生きるのです。

ここで、マルティン・ルターの人生の映画からもうひとつ映像をご覧ください。この映像で、ルターは修道士の指導者で霊の父である人物と口論になっています。ここでルターは、ローマ人への手紙から見出したことを彼に告げます。そして、当時の宗教的な慣習をその真理に照らしています。ルターは、当時の慣習がクリスチャン生活にとって不健全で、聖書が認めるものではないと考えていました。

(映像 2)

マルティン・ルター：...ますます確信するようになったのです。司教様、もともとあった小さな確信はあなたが与えてくださったものです。あなたは私の罪を聞き、私の信仰を強めるためにローマへ送られました。神を見出すために、みことばへと向かわせられました。そして、神のみことばを伝えるためにここヴィッテンベルクに遣わされました。今私はこの部屋で、聖パウロのローマ人への手紙に関する説教を準備しております。ここに、私はついに真理を見出しました。これを悟った時、まるで天の扉が私に向かって開かれたように感じました。ローマ 1 章 17 節です。

司教総代理 (聖書をラテン語で引用しながら)：「インスティティア エニム デイ…ふむふむ…インスティティア エニム デイ…」 「神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです。」それがどうしたのかね。

マルティン・ルター：司教様、ここに聖遺物に関する記載があるでしょうか。人は信仰によって生き、信仰によって義とされるのです。その行いによってではありません。聖遺物を拝むことも、ミサで歌うことも、ローマへの巡礼も、罪の赦しを買うことも、関係ありません。神の御子をとおしてすでに成された御業を信じる信仰によって義とされるのです。

司教総代理：マルティン君、では、クリスチャンが信仰によってのみ生き、すべての善い業、これらのすばらしい行いをただの付属だと言うのなら、その代わりに何があるのかね。

マルティン・ルター：キリストです。人間に必要なのはイエス・キリストのみです。

(司教総代理は立ちあがり出ていく。)

マルティン・ルター：義人は信仰によって生きる。

ソラ・フィデ…「信仰によってのみ」

では、原理その三に進みましょう。これは手短かに説明します。

原理その三：ソラ・グラティア「恵みのみ」

エペソ人への手紙 2 章の前半を読みましょう。

エペソ 2 : 1-10

2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子ら

の中に働いている霊に従って、歩んでいました。2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ**恵み**によるのです——2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな**御恵み**を、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。2:8 あなたがたは、**恵み**のゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。2:9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。2:10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

1節をご覧ください。

2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、

次に、ヨハネ6：44を読みましょう。

ヨハネ6:44 わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。…

死んでいた。私たちは霊的に死んでいました。自分で自分を救うことはできないのです。神が私たちを御子に引き寄せられることによってのみ、私たちは御子のところに来て救われるのです。これがソラ・グラティアの原理です。

では、エペソ2：8-10をもう一度読みましょう。これは、聖書の中でも偉大なみことばです。

エペソ2：8-10

2:8 あなたがたは、**恵み**のゆえに、**信仰**によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、**神からの賜物**です。2:9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。2:10 **私たちは神の作品**であって、**良い行いをするために**キリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが**良い行いに歩むように**、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

8節。救いは信仰によって恵みのゆえに与えられます。私たちの功績ではありません。9節。行いによるものではありません。10節は、行いについて語ります。私たちは神の作品であると語ります。私たちは自分で自分を造ったものではありません。また、自分自身を救ったのでもありません。神が私たちを救い、形作られるお方なのです。その目的とはなんでしょう。それは、良い行いをするためです。良い行いは救われた後に始まるのです。これが神の意図されたかたちです。神は、私たちが良い行いに歩むのを望まれます。良い行いは、クリスチャンのライフスタイルの一部ですが、救いを得る手段ではありません。それが重要なポイントです。

原理その四：ソルス・クリストゥス「キリストのみ」または「キリストによってのみ」

テモテ第一2：5-6

2:5 神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。2:6 キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。…

ヨハネ14：6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

この世にはあらゆる人種の人々がいて、その大半はいろんな神々を拝んでいます。けれども、私たち全員をお造りになった創造主との和解を可能とする道はたったひとつです。それは、イエス・キリスト、神の御子です。このお方は人類の贖いのためにご自身のいのちをささげてくださいました。このお方だけが、私たちの罪を贖うことのできるいけにえです。

ヨハネ第一 2 : 1-2

2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。2:2 この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。

使徒 4:12 この方（イエス・キリスト）以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」

これこそが、私たちが全世界に伝えるべきメッセージです。

私たちは、キリストのみに信仰をおくことによるのみ、恵みによるのみ救われます。

私たちは、キリストのみに信仰をおくことによるのみ、恵みによるのみ救われます。

これは、有名なマルティン・ルターの肖像画です。この絵の中で、ルターは教会の教壇に立ち、会衆にイエス・キリストを指し示しています。「…天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」（使徒 4 : 12 b）

原理その五：ソリ・デオ・グロリア「神の栄光のみ」

私たちの言動はすべて、神の栄光のためになされるべきです。何をするにも、私たちは、成し遂げる力を与えてくださるのは神であるということ覚えておかなければなりません。私たちの救いも、最初から最後まで神によるものです。ですから、私たちは自分自身の何ものも自らの救いに至らしめたものとして誇ることはできません。私たちのお手柄はないのです。神が私たちに手を差し伸べ、父なる神が御子を贖い主として地上に遣わしてくださったのです。私たちを神に引き寄せてくださるのも神です。そして、私たちのうちに住まい、クリスチャン人生を生きる力を与えるために、神の聖霊を送ってくださったのも神です。すべての栄光は神のものです。

黙示録 1:6 また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。

エペソ 3:21 教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

ペテロ第一 4:11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。

コリント第一 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。

「何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」

私は、子どものころに通っていた日曜学校である日習ったことをはっきりと覚えています。先ほどお話したように、私は当時ルーテル教会に通っていました。小学2年生の時の日曜学校の先生はミルネ先生でした。不思議なことに、日曜学校の先生で名前を覚えているのはミルネ先生だけ

です。先生が教えてくれた、とても印象深い授業がありました。先生はある新しい言葉を教えてくれました。それは“vocation”という単語です。先生はお休みという意味の“vacation”ではありませんよ、と教えてくれました。どこかに旅行に行ったり、2-3日お休みしたりすることではありません、とされました。“vocation”です。この単語は、私たちが人生をかけて何をするかを指します。日本語では、「使命」「神の召し」などと訳されます。先生は、これは生活費を稼ぐための仕事とは違いますが、と言いました。“vocation”「使命」「神の召し」は、私たちが人生を生きる生き方です。学校に行くとか生活費を稼ぐ以上に深い目的意識を持って生きる生き方です。私たちは神に属する者です。ですから、人間関係においても、職場や家庭、教会、教会以外の場所でも、神をたたえることを目指して生きるべきです。何年も経って大学生のとき、私はこれと同じ教えをさらに受け、その教えがしっかりと身に着きました。改革派支持者が大切にしていたモットーをもうひとつ学びました。それは、「生涯、主なるキリストのもとで」というものです。

私は常に、そのように生きようと努めてきました。グループの学びなどで私が祈るのを聞いたことがある人は、「私たちがすべてにおいて神をたたえられますように」と私が祈るのを聞いたことがあるかもしれません。私は日々、このように祈っています。

今日の宗教改革におけるプロテスタントの五大原理のメッセージも終盤です。最後に、マルティン・ルターの映画から、もうひとつ映像をご覧ください。その前に、メッセージの後に歌う賛美歌についてお話しします。これは、「神はわがやぐら」というルターが作詞したもっとも有名な賛美歌で、詩篇 46 篇に基づいています。

46:1 神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。

46:11 万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。

セラ

今日のメッセージの冒頭で、マルティン・ルターの人生の映画からひとつの映像をご覧ください。その場面は、宗教改革に火を付けた有名な出来事についてでした。今度は、もうひとつ有名な出来事を描いた場面をご覧ください。これは、ルターがドイツ議会の前で自らの信条について答弁した時のことです。聖職者の中には、ルターをローマでの裁きにかけることを望む者もいましたが、ルターが住んでいた地域の君主が、裁判を行うべき適切な場所は議会だと考えました。その場所が、ヴォルムスの町でした。これは、ヴォルムス帝国議会として知られています。

皆さんに、この内容をしっかり感じとっていただきたいので、ここでは5分間の映像をご覧ください。まず、ザクセン選帝侯フリードリヒ3世が、マルティン・ルターを裁く場所について自らの考えを説明します。そして、ルターの一行がヴォルムスに旅します。また、神聖ローマ帝国の若い皇帝カールも登場します。それから、議会の前にルターが姿をあらわします。

(映像 3)

選帝侯フリードリヒ公：私はマルティン・ルターに一度しか会ったことがない。彼の書も読んでいない。私は忠臣たちのように彼の教えを支持してはいない。しかし、この人物が神を恐れることを学び、強く信じていることは知っている。だが、彼がただの泥棒であったとしても、鎖につないでローマに引いていくことは許さない。誤解しないでほしい。ルターという人物が重要なのではない。これは、私の方針である。容疑をかけられた人物は、同国人の前で公平に裁かれるべきである。アレハンドロ卿、ルターは私の民である。彼が私に忠誠を尽くすべきであるように、私は彼を守らなければならない。クリスチャンとしても君主としても、これは譲れない。こういうわけで、この件を議会に持っていき、そこでルターの処遇を決議されるよう提案する。

ナレーター：1521年春、ルターはヴォルムス帝国議会に召喚された。

(ルターの支持者がヴォルムスの町に入る。)

ナレーター：ヴォルムスで待っていたのは、ハプスブルク家、オーストリア、ブルゴーニュ、低地帯（現在のベルギー・オランダ・ルクセンブルク）、ナポリ、スペインなどの領主、神聖ローマ帝国皇帝、カール5世などであった。

カール皇帝：私はこの男を裁判に召喚したのに、この男は勝利を得たようにやってきた。確かにこの男で間違いないのかね。

枢機卿アレアンドロ：陛下、この男がどんなふうに入ってきたかは重要ではございません。重要なのはその答えです。この男に話す機会を与えてはいけません。この尋問の進め方でよろしいでしょうか。

カール皇帝（尋問の進め方に目を通して承認する）：彼の著作物はあるかね。

マインツの大司教：はい陛下。すべてございます。

（議集まる）

侍従：ルター君、質問されるまで話さないように。…マルティン・ルター、聖なる無敵の陛下により、質問に答えるため、あなたは王座の前に召喚されました。質問は、ふたつだけです。その一：これらはあなたの書いたものですか。

マルティン・ルター：はい、そうです。

侍従：陛下のふたつめの質問は、次のとおりです。マルティン・ルター、あなたは、自らが書いた内容を主張し続けますか。それとも、この文書とそこに記された信条を撤回しますか。

マルティン・ルター：偉大なる皇帝、王、領主の皆さま、私は尋問されるためではなく、議論するつもりでここにやってまいりました。

侍従：ルター君、質問に答えてください。あなたは自らの文書を撤回するのですか、しないのですか。

マルティン・ルター：この裁判の進め方は理解できません。撤回ですか。まず話を聞いてはくさらないのですか。

侍従：陛下の質問は聞こえたでしょう。陛下はあなたの答えを待っておられます。

マルティン・ルター：偉大なる皇帝、王、高貴な領主の皆さま、私はただの人間であり、神ではありません。しかし、今ここで私は、イエス・キリストがご自身を弁護されたように弁護するしかありません。「もしわたしの言ったことが悪いなら、その悪い証拠を示しなさい。」

侍従：マルティン・ルター、あなたはまだ質問に答えていません。簡潔に答えてください。撤回するのですか、しないのですか。

マルティン・ルター：簡潔な答えをとおっしゃるので、簡潔にお答えしましょう。私が間違っていると納得できないのであれば、互いに矛盾したことを言い合う教皇や議会ではなく、みことばによって私を説得できないのであれば、私は聖書の教えるところによる信条を持ち続けざるを得ません。私の良心は、神のみことばにとらえられています。この良心に背くことは、正しくも安全でもありません。ですから、撤回はできません。このとおり、他に選択肢はありません。神が私をお助けくださいますように。アーメン。

1517年、マルティン・ルターは革命を起こしました。けれども、彼自身は実に保守的な人物でした。彼はただ、聖書に従いたかっただけなのです。彼は、聖書が私たちに与えられた最高權威だと信じました。ルターは、教会制度の中で神のみことばに反するものについて、異議を唱えるという勇気を出しました。彼は、聖書に従いました。それ以外のことは、正しくも安全でもないからです。彼は言いました。「このとおり、他に選択肢はありません。」

インターネットで閲覧できる資料：

マルティン・ルターの映画（ユーチューブ）：<https://www.youtube.com/watch?v=xpBSTUDtKuU>

マルティン・ルターに関する説教：<https://www.youtube.com/watch?v=56iHlhtGl4Q>

プロテスタント宗教改革に関するサイト：<http://protestantism.co.uk/reformers>

（※これらのサイトはすべて英語のサイトとなっております。）